

# 『TENDER HEART』

著作 a s h

この作品は『To Heart』（リーフ・ビジュアルノベルシリーズVOL.3）を元にしています。

## 1.Engineer

来栖川エレクトロニクスHM研究所内のとある一室。

そこにはHMX12型開発の責任者である長瀬が、さも面白くなさそうな表情でワープロのキーを叩いていた。

普段からとぼけたような表情をしているのだが、彼を知る人間なら、今の彼の機嫌が非常に悪い事を察知できるだろう。しかし、それを知り得ない人物もいるし、知り得てなお近づく者もいる。

「長瀬主任、こっちの書類に検印お願いします」

長瀬のプロジェクトチームの一員である若い技術者が、何やら書類を持って長瀬に近づいて言ったのだ。

長瀬は手を止めて、近づいて来た男に短く言う。

「山本君、悪いが後にしてくれないか」

機嫌が悪い時ほど、長瀬の語りは短く歯切れがよくなる。だが、山本と呼ばれた男の方

『TENDER HEART』

もそれが分かってないのか、緊急の書類なのか、引き下がろうとはしなかった。

「いえ、これも以前にお願いした書類ですけど、今日中に出さないといけないものですか  
ら」

この山本と言う男、実は長瀬に気に入られている。言うべき事は言ってくるし、仕事の進め方にもそつがない。経験不足ゆえに、懐刀と言うにはまだ至っていないが、長瀬の信任は厚い。

「……しようがないなあ」

と、顔を山本の方に向けて、長瀬はその書類を受け取った。改めて見てみれば、確かに数日前に言われた覚えがあるものだった。

そして、長瀬がその書類に押印をしようとしてると、山本がぼつりと言い出した。

「例の新型はどうなったんですか？ 今日当たり本社の方針が決まるんじゃないかなかったですか？」

苦虫をかみつぶしたような表情で、山本の書類に検印を押しながら、長瀬が答える。

「……この表情で分かんかね？ ……と、はい、書類」

さっと書類を山本に渡し、何気なく机の上に目をやった。

「あ、ありがとうございます」

さつき自分が持ってきた書類を受け取りながら、山本が長瀬の視線の先を追ってみると、山積みになった書類の一番上に大きな茶封筒があった。

「そこに昨日決まった事が書いてある。読みたければ構わないよ」

「いいんですか？」

『TENDER HEART』

「ああ」

長瀬の返事の後、山本はその茶封筒を手にとって、その中にあった議事録をきつと黙読した。

それは長瀬ともう一つのプロジェクトチームで進められていた二種類のメイドロボに関する販売方針を決めたもので、本来ならば部長クラスしか読まないものだった。

「こ、これって……」

山本が感嘆の声を上げたのは、その書類を読む事に恐縮したからではない。その内容が彼にそうさせたのである。

「HM12型を廉価版として設定するって…。それじゃあ、マルチは？」  
マルチ。

これは長瀬たちが取り組んでいたHMX12型の愛称。一般商品化されたら別の名前が商品企画部によって付けられる事だろうが、ここではマルチと呼ばれていた。なお、HM12が本来の形式番号で、HMXは試作モデルの意味である。

「まあ、一通り読んでみなさい」

山本の質問に対して、長瀬は短く答えただけだった。そして、それに促されるように山本は議事録を読み進める。

ややあって議事録から視線を動かした山本の表情は、落胆とも驚愕ともとれるものだった。

「…そういう事ですょ」

わざと丁寧語で話す長瀬の言葉は、明らかに不機嫌の色を増していた。

『TENDER HEART』

「…マルチはマルチじゃなくなるんですね…」

妙な言い方だが、長瀬たちも所詮は米栖川の商品開発をしていたに過ぎない。

それがHMX12型だった。

そもその開発コンセプトは「ロボットが苦手な人でも、気楽に相手が出来るとな家庭的なメイドロボ」と言うもので、これまでの物よりも人間が親しみを持てるようなロボットを目指していたのだ。

そして、彼らはそのアプローチを「より人間らしいロボット」と言う手段で行う事にした。そして、その徹底ぶりは壮絶だった。

結果、HMX12型は、これまでのロボットと違い複雑な対外反応を返す事のできるロボットとなった。

人間のように笑い、人間のように泣き、人間のように喜び、人間のように悲しむ。動力ユニットの冷却にはこれまでの冷却液ではなく、水道水を使えるようにして、汗や涙なども出せるようになっていた。記憶装置も深層記憶と表層記憶とを持ち、それらを整理する際に人間で言う「夢」を見る事すらある。

感情を持つロボット——それがマルチ。

実社会生活における適応テストを終えて、ほぼ完全に近い形で出来上がっているのだ。

だが、本社経営陣からは、高性能仕様のモデルを同時に販売しても売れないとの見地から、HMX12型の仕様を大幅にコストダウンしたものへの変更が決定したとの旨。それが議事録にあった内容だった。

なお高性能モデルとはもう一つのチームで進めていたHMX13型の事である。

『TENDER HEART』

衛星との直接リンクが可能なモデルで、オフィス・家庭・病院など活躍の場を選ばないのが最大のメリット。開発時の名称は『セリオ』と言う。

「…しようがないね、我々も仕事でやってるんだから」

長瀬はワープロを打つのを中断したまま、山本に答えた。無論、その語調にはあきらめともとれるものが含まれていた。

「それでいいんですか？」

山本はそんな長瀬に聞き返す。が、長瀬はそれにも短く答えるだけだった。

「何が？」

「…マルチは我々の思った以上の完成度なんですよ。それに…」

不意に山本の言葉が詰まる。口に出していいのかどうか、躊躇ってるのだ。だが、そんな山本の心中を察してか、長瀬が怪訝そうな表情で答えた。

「…：例の『彼氏』の事かね？」

「…：そうです」

非常にまれな事だが、マルチは極めて人間的な感情を持っている。いや、持ってしまったと言うべきか。そして、実社会生活における適応テストのために高校に一週間余り通った結果、マルチには恋人が出来たのだ。

ロボットと人間の間で、果たしてそれを恋人と呼べるのかどうかは分からないが、それによりマルチの感情面の成長が一層進んだのは言うまでもない。

研究所に戻るたびに、マルチは嬉しそうにその日の出来事を長瀬たちに話した。その表情が日に日に豊かにかつ自然になって行くのだ。

『TENDER HEART』

開発者としては、それは嬉しい誤算だった。

よもやロボットを相手に恋愛をする者が現れるとも、マルチがそんな感情までもあらわにするとも思っていなかったからだ。

山本は純粋な学術的興味から、マルチがどこまで相手の事を真剣に思ってるのかを知りたかったが、「彼氏」の事を嬉しそうに話すマルチの姿を見ては、彼自身疑問に感じる事があつた。

ロボットがある特定人物に自己の判断で付き従つた場合、本来の目的から外れた行動を取りはしないだろうか。恋は盲目というではないか。もし、自らの基本的な使命よりも、ある人物の方が重要と判断した場合、どこかに論理矛盾を起こしはしないだろうか。

『彼氏』は、本気かどうか分からないでしょう」

長瀬は冷たく言い返すが、それも無理はない。世の中変わった嗜好の持ち主などたくさんいるし、「彼氏」もその一人かも知れないのだ。

「…興味本位でも変態的嗜好でも、マルチに多大な影響を与えたのは事実ですから。『彼氏』はどう思いますかね…」

テスト終了後のマルチの体内に残されていた精液は、その夜の『彼氏』の行動を何よりも語っていた。もちろん、マルチが無理矢理犯されたと言うのではない事は、マルチの言葉と記憶から分かっていた。本来のマルチの用途からすると、そのような行為は完全に蛇足なのだが。

「分からないねえ。でも、『彼氏』はあの子を人間として見てたようだから、今度の会議の決定に従ったら、がっかりするだろうね」

『TENDER HEART』

「…ロボットを人間として見る事が間違ってるんじゃないですか？」

「でも、あの子はそのような位置付けだったじゃないかね。それに、チームの中でも、特にあの子の情操教育に熱心だったのは君じゃないか、山本君」

「はい、確かにそうですね、それは人に優しいロボットを目指してただけですよ」

「割り切ってるねえ」

「そうでなきゃ、ロボットなんて作れませんよ……」

「考えてみればあの子も不憫だね」

「…マルチは自分の目的も立場も分かっていますからね。でも、自分でそんな風には思ったりしないですから」

マルチの思考制御はなかなか複雑だが、ある種の推測や疑問に対しては、一切思考が働かないようになってる。

『『思ったりしない』じゃなくて、『そう思う事はできないようにしてある』でしょう？』

訂正する長瀬の言葉は、どこか自嘲の色を含んでいた。

「…そうですね。我々がそうさせてるんです」

身勝手な事だな、と山本は思わず苦笑してしまう。

自分たちがマルチに感情を植え付けておきながら、一方では制限を付けるなど、それは傲慢でしかないと少なからず感じていたのだ。

「まあ、どっちにしても、あの子のデータを整理し終えたら、量産型への設計変更をやらなくちゃいけないねえ」

『TENDER HEART』

「と、すると、やはり感情制御と全体の挙動システムですかね。あとは各パーツを廉価版に切り替えて…」

山本がさつと低価格化の手法を言うと、長瀬も頷きながらそれを補足する。

「大体そんなものだろうね。後は動力とバッテリーの組み合わせの選択と言うところだね。どっちにしても、市販モデルには複雑な感情もメモリも要らないのは間違いないな」

またどこかに自嘲を含んだ語調。いや、長瀬自身もこうなる事はある程度予測していたはずだった。

感情制御のためのコストは結構高い。

同じような予算枠で開発が進められたセリオが衛星リンクなどの高い機能を持っているのに対して、マルチは感情制御に予算をすぎ込んだ分だけ、良くも悪くも人間以上の機能は持ち合わせていない。

当初からの「人間らしく」と言うコンセプトがそのまま実現した形になっているのだった。

ロボットとしての優れた機能を持ったセリオに比べて、マルチはある意味役立たずのロボットである。そのマルチの真価は、ロボットを単なる道具としてしか見ない場合は理解されないだろう。

何故長瀬がマルチをあれほど人間らしくする事にこだわったのか。その理由を山本は聞いた事がない。山本は山本で、そんなロボットに対するこだわりを持っていたからである。

山本の目的は介護ロボットである。

当初のメイドロボの需要は、老人介護が主眼だった。だから、今市販されているメイド



『TENDER HEART』

ロボの多くは、その機能だけは必ず持っている。また、老人や弱者保護はメイドロボの基本命題でもあった。だが、今のロボットは常に冷静で、的確に処理をしてくれる。それが何を意味するか。

ロボットに介護される人の中には、「自分が何だか人間ではないように思える」と言ってもあった。そのため、介護される人間は、まるで自分が「もの」になった気分を味わうと言う事だ。ロボットが終始無表情でいると言う訳ではないが、やはり作り物だと言う域を超えてなかった。

本当に介護を必要とする人にとって、身の回りをするだけのロボットでは役に立たない。その人の家族となつて、一緒に笑い、一緒に泣けるロボットでなければいけない。

介護に本当に必要なのは、機能ではなく心なのだ。

それに対する山本の答えが「人間に近い感情を持ったロボット」だった。そして、それを具現化したのがマルチだった。

「…結局ロボットは人間の友足り得ないんですかね」

「さあねえ…」

長瀬はつぶやくように短く答え、再びワープロのキーを叩き始めた。

山本もそれ以上そこにいる理由もなく、静かにその部屋を出て行った。

## 『TENDER HEART』

### 2.Robot

HMX12型「マルチ」は専用のドックの中にいた。

最終テストを終え、記憶装置の内容や、それとは別に取っていた各挙動部のトレースデータなどを研究所の大型コンピュータに移し、ボディの損傷程度などの細かな検査を行っているのだ。

一週間あまりの実生活において、どの部位がどのように使われ、どの程度損傷しているか。これらのデータを基にして、改善すべき項目を抽出するのだがこの作業はそれなりの時間を要する。

山本はドックに入れられたマルチを見つめていた。

マルチ本体の記憶装置も動力ユニットも今は取り外されているので、そこにあるのは文字通りの抜け殻に過ぎない。だが、山本がじっと見詰めていると、マルチが何やら気恥ずかしそうに笑ったような気がした。

その笑みも所詮は自分たちが作った「もの」に過ぎないのに……とふと山本の心の中に浮かび上がる自嘲の色。

『皆さんとても大事にしてくれていますよ。でも、浩之さんはとても優しいんです。本当ならロボットのわたしがやらなくちゃいけないのに、ご迷惑ばかり掛けてしまってるのが心苦しいんですけど……』

嬉しそうに彼氏の事を話すマルチの姿は、誰が見ても人間と思うだろう。事実開発スタッフは皆「マルチ」「マルチちゃん」「マルちゃん」など、親しみを込めて呼んでいた。

## 『TENDER HEART』

感情を持ったロボットを、ロボットと定義して構わないのか？ この疑問は山本自身が感じた事だ。マルチの情操教育は文字通り子育てのようなものであり、実際にやっている事は子育てと変わらない。ただ、成長速度が極端に早いだけなのだ。

山本は感情制御プログラムを担当している。マルチに色々な事を教え込み、マルチの感情の成長を促すのは彼の仕事でもある。そして、その中に「好き」と言う感情も含まれていた。

「マルチ：お前は幸せなのか？ こんな風になって、お前の感情プログラムは市販製品に展開される事はなくなったのに、それでも幸せかい？」

市販型にマルチと同等の感情制御プログラムを組み入れる事は、絶対にない。それでお、マルチのテストの結果は意味があるのだろうか。マルチが自分で感じた事も想いもすべて無駄になってしまうのだろうか。

マルチの感情制御プログラムは、実のところまるで意味を持たない訳でもない。この技術はある特定用途には向いてるからだ。だが、商品化を決定するのも、新商品の企画を出すのも、研究所の範疇ではない。それだけに、山本は今のマルチの姿にやるせない気持ちを抱いていた。

マルチが横たわるドックの脇にある操作卓の前に座り、おもむろにキーを叩く山本。その操作卓はドックのマルチの管理とテストのために、マルチのデータを記録してあるコンピュータに繋がっている。

しばらくして、画面にマルチの顔だけが映し出される。本体の整備やパーツの試験中こうして、本体のないマルチを呼び出して会話する事も出来る。これは主に感情制御プロ

『TENDER HEART』

グラムの修正および確認のための機構だが、こうする事により今でもマルチと会話が出来るのだ。

「やあ、マルチ」

山本が操作卓の脇のマイクに向かって喋ると、画面のマルチはいつもと同じように笑いながら答えた。

画面に映し出されているマルチの表情はすべてコンピュータグラフィックによる合成に過ぎないが、本体搭載時と同じような表情を作り出せるのだ。音声は本体にあるものと同じ発声装置が卓内にある。

『こんにちは、山本さん。今日もメンテナンスですか？』

「いや、今日はやらないよ。そんな事よりも君に聞きたい事があってね」

『何ですか？』

マルチは少し首を傾げるようにして、山本に聞き返した。ちなみに、この状態のマルチに視覚情報は伝達されていない。それを設定する事も可能だが、山本はそれをやらなかった。もしかしたら、自分の表情からマルチが何かを感じるかも知れないと思ったからだ。

「マルチは寂しいと思った事はないかい？」

『寂しい…ですか？ わたし、山本さんや皆さんに可愛がってもらいましたから、そんな風に思った事はありません』

マルチの答えは山本の予想の範囲内だった。

「それじゃ、今も寂しくないのかな？」

『はいっ。でも……』

『TENDER HEART』

マルチは元気に頷いた直後、少し寂しそうな笑みを浮かべていた。  
これだ。

この感情の発現が自分の予想外だった部分だ。マルチが言い渋ったのは、その先に続く言葉を出すのを躊躇っているからであり、ここまで感情を出せるロボットはいない。

「彼に会いたいかい？」

山本がそう問い掛けた瞬間、マルチの顔は一気に赤くなり、慌てて答える。

『そ、そんな事は…』

からかっているつもりではなかったのだが、山本の質問に対してマルチはまともに答えられなかった。

これが本当に自分がプログラムしたものの反応なんだろうか。山本はそんな疑問を改めて感じてしまう。マルチを最終テストに送り出して以来、ずっと感じていた疑問を。

その後は、当たり前障りのない会話をして、マルチと別れる。別れると言っても、マルチの感情プログラムの呼び出しをやめると言うだけの事に過ぎない。

「ふうう……」

この若い技術者はいつからか、ため息が多くなった。

「感情豊かなロボット」は山本にとっての大きな目標だったはずだ。だが、こうしてそれを目の当たりにすると、ため息ばかりついているのだ。

人は神にはなり得ない。ゆえに、人が作ったロボットは人にはなり得ない。

ロボットとして作られた以上、余計な感情は持たない方が幸せなのかも知れない。いや、山本にとってマルチは一つの研究の成果に過ぎないのだ。感情を持つ事で、マルチがどう

『TENDER HEART』

なろうがそれは二次的な問題のはずだ。そう決めていたはずだった。だが、出来上がったマルチは人間そのものだった。

何も出来ずにいて、おろおろしてるマルチ。

褒められてとても嬉しそうにするマルチ。

その仕種や表情には、「ロボットらしさ」が微塵も感じられない。まさに大成功と言える結果だった。

だが、マルチが最終テストに出されてから、マルチの感情に変化が見られるようになった。

マルチ自身も「何だかよく分からないんですけど、ある人と話すとは何か安心するんです」と言った事もある。

山本は感情制御プログラムの不具合が露見したのかと思ったが、それはある感情の優先度が高くなったためだと判明した。

その感情とは、「好意」。

マルチは明らかにその人物に好意を抱いている。そのため、それに伴う反応が各部に現れるようになっていたのだ。それが分かった時、山本は少なからず驚き、その感情がどこまで成長するのか純粋に興味を抱いた。そして、その感情をも成長させる事を考え、そのように取り計らった。

その結果が「ロボットらしくないロボット」のマルチなのだ。

だが、「ロボットらしくないロボット」でも、「人間のようなロボット」でも、それは人間ではない。自分たちが作り出した「もの」に過ぎず、それがロボットなのだ。

『TENDER HEART』

ともすれば、作り出した自分たちですら忘れてしまいそうになるほど、マルチはロボツトらしさを感じさせない。そんなマルチを見るにつけ山本の中では、技術者としての自分と、マルチを育てた親としての自分が激しく対立するのだった。

『マルチはほぼ人間に近い感情を持っている。何て凄い事だ！』

技術者としての自分は、マルチの完璧さを絶賛し、これほどの物を作り出せた自分を誇りに思っている。

『マルチは何故感情を持ってしまったのか。』

だが、育て親としての自分は、マルチを見るのがつらかった。完璧さゆえに悲しかったのだ。

『TENDER HEART』

市販型への設計変更はマルチのデータ解析と平行して行われる事になった。そのせいで、山本の仕事はもっぱらマルチのデータを解析する事だけしかなかった。研究所に来てする事と言えば、マルチのドックの操作卓に居座って、長時間キーを叩きつづけるだけ。時折マルチと話をするが、それも段々と少なくなっていく。

そんなある日の事だった、長瀬が山本を呼び出したのは。

「…何でしょうか、長瀬主任」

自分の机の前に来た山本を見て長瀬は、山本の様子が以前と違う事に気が付いた。いや、それを分かっていたからこうして呼んだのだが。

「ああ、悪いね。忙しいところを呼び出したりして」

ややのんびりとした口調。これが長瀬のいつもの調子である。

「いえ、別に忙しい訳ではないですよ。設計変更の作業に入ってる訳じゃありませんし…」

山本はどちらかと言えば人工知能専門で、ロボット本体の設計には加わっていない。そのため、他のメンバーに比べればさほど忙しくはない。別段そちらが全然駄目と言うのではなく、ロボット工学全般にも明るいのだが、作業の分担でそうなるだけに過ぎないのだが。

「そうかね？ マルチのデータ解析に熱心だと聞いたんだがね」

「他に出来る事はありませんからね、私には」



『TENDER HEART』

明らかにいつもの山本とは違った語調。長瀬は苦笑しながら、それに答える。

「それは君でなければ出来ない事だから、君がやってるんじゃないのかい？」

「…そうですね。申し訳ありませんでした」

論すような長瀬の言葉を山本は正直に受け止め、軽く一礼をした。それを見ながら、長瀬は本題を切り出す。

「ところでそのマルチなんだがね。あの子の感情プログラムとデータを圧縮した場合、どの程度にまで収まるかね？」

「は？」

突然の長瀬の質問に、山本は間拔けな表情で聞き返すしか出来なかった。そして、しばらくしてその質問を理解して、答えるのだった。

「…記憶の整理を行えば、かなり圧縮できると思いますが」

かなり大雑把な答えだったが、長瀬はそれで満足して、次の質問をする。

「では、それを可搬媒体に移して、しかる後にマルチにそれを復元する事は出来るかね？」

「……可能です。量が膨大になる恐れもありますが、論理的にも物理的にも可能な範囲です」

「そうかい……」

山本の答えを聞いて、頷くようにしている長瀬を見て、山本は長瀬に聞き返す。

「一体何を考えてるんですか、長瀬主任は…」

その問いに対して、長瀬は一度にやりと笑い、胸ポケットからタバコを取り出して、お

『TENDER HEART』

もむろに吸い始めた。

長瀬が一息だけタバコを吸って、ゆっくりと煙を吐く様を見ながら、山本は返事を待っていた。すると、しばらくして、

「…この間、彼に会ってねえ……」

タバコを啜えながら、ゆっくりと長瀬が話し出した。

「彼？　って、もしかして、マルチの『彼氏』ですか？」

にわか山本の目の色が変わる。

「ああ」

「確か…藤田浩之とか言う人物でしたよね。それで、何を話したんですか？」

長瀬が何の目的で彼に会ったのかは知らないが、山本は彼の事を少なからず知っている。それはマルチの記憶の中の彼だが。

「…いや、別にこれと言って話をした訳じゃないよ。ただ、彼がどんな男なのかを見たかっただけだからねえ…」

「そうですか……」

そっけない長瀬の答えに、山本はわずかに落胆した。だが、長瀬はタバコをもう一息吸ってから、言った。

「…あの子が惚れるのも何となく分かったような気がするね。ところで山本君は興味がないかい？」

「何にですか？」

「あの子の感情が今後どれほどの成長を見せるか」

『TENDER HEART』

「…それは机上の空論ですね、今となっては。…って、まさか、長瀬主任…」

長瀬の話し振りから、山本はある答えを見つけた。しかし、それは本来なら有り得ない話だ。

「何だね？」

「長瀬主任はもしかして…マルチを？」

山本がある推測に基いて、長瀬の真意を凶ろうとする。しかし、長瀬は相変わらざるのどばけぶりで返す。

「さて？ 何の事だろうか？ ただ、マルチの記憶によると、彼は約束してたんだらう、

『マルチが市販されたら買う』って」

「え、ええ、確かにそうですが」

「…ところで、試作型のボディなんだけどね。一通りの作業が終わったら、いずれは廃棄処分になくちやいけなただけどね。一応社外秘事項だしね」

突然話題が替わったが、それも山本の推測の範疇だった。

「……」

「だが、ある研究目的に特化した用途を見出せない事もないんだよね」

「それって…」

「つまり、それを研究として認可させれば、本体を壊す必要はない。ただ、研究に協力してくれる人物を選び出さなくちやいけなのが面倒だがねえ。それさえいれば、これにの〇を出してもいいんだがね……」

まだ吸いかけのタバコを灰皿でねじ込むように消して、長瀬はやや上目遣いで山本を見

『TENDER HEART』

つめる。

「…彼にマルチを預けるんですか？」

「さあ、まだ決まってる事だから何とも言えないが、念のためいつでもそれが出来るように準備だけはしておいてくれないか、山本君」

長瀬の言葉は最後の「山本君」の部分だけが強調されていた。それがどんな意味を持つのかを理解できない山本ではない。

「はい、分かりました」

短くそう答えると、山本は長瀬の前から去って行った。

山本が行った後、長瀬はもう一本タバコに火を点けて、ふーっと思いつきり吸い込んだ。そして、煙のため息混じりの独り言。

「やれやれ……。この研究がいつまで続くかは考えないのかい、山本君…」

先ほどとは違って、その表情はどこか苦渋に染まっていた。

山本の方とは言う、これもマルチのドック脇に佇んで、何やら物思いにふけていた。研究とは言え、それによってマルチは再び動き出す。それはそれで嬉しい事には違いない。だが、自分たちはマルチと彼氏をモルモットとして見ているだけなのではないか。

「ロボットの持つ心はどこまで人間に近づくか」と言うのが、主題になるであろうが、そのために一人の人間と…いや、二人の人間を実験材料にしているのか？

もしマルチに尋ねたら、どんな答えが返ってくるだろう？ 研究だろうが何だろうが、

「それでも一緒にいたい」と言うだろうか。…恐らく聞くまでもない。マルチは言うに決まってる。「一緒にいたいです」と。

『TENDER HEART』

…そういう事なのだ。

マルチはそれを望んでるのだ。

そして、彼も。

ならば自分もそれを叶えるべきではないか。それがどんな結果を生もうとも。

今は動く事のないマルチの本体を見つめながら、その時はっきりと決心した。マルチを彼に預ける事を。そして、その先何があろうと後悔しない事を。

そして、数日を経てそのプロジェクトは正式に動き出す事になった。責任者は長瀬であり、メインスタッフは山本だった。

ただ、具体的に動き出すには、まず市販型の完成が先決であり、それまでマルチの本体は手付かずの状態で置かれる事になった。山本もマルチの解析を終えた後、市販型の基本プログラムなどに取り掛かりあつと言う間に時間が過ぎて行った。

市販型の作業が落ち着いた頃、長瀬は山本を呼び出して、マルチの作業の進行状況について話し合った。

小さな会議卓に向かい合って座り、長瀬はタバコをゆっくりと吸いながら、山本はプロジェクト関連の書類を広げながら、一つ一つの作業について確認をして行く。

「マルチの方の準備は出来てるかい？」

長瀬が聞くと、山本は書類に一瞥する事なく、すぐに答える。これは自分の本来の作業でもあるので、わざわざ書類を見るまでもない。

「はい。感情制御プログラムとこれまでのデータ、それに新たなデータを用意して、それらの復元用のコードをマルチ本体に組み込むまでは出来ています」

『TENDER HEART』

「新たなデータ？」

長瀬が怪訝そうに返すと、山本は書類の一部を長瀬に見せながら、説明を始めた。

「今回の目的は『より人間らしく出来るか』ですから、今までのマルチには設定してなかった感情データを新たに追加したんです」

山本の説明と提示された書類を見ながら、長瀬はぼそりとつぶやいた。

「…それで、『憎しみ』や『怒り』もかね…。安全性は大丈夫なのかい？」

「はい。最低限の法則はマルチの感情制御プログラムよりも優先度が高いですから、感情制御プログラムの選択の結果が、人間に危害を及ぼす恐れがある場合、マルチは完全停止します」

「あの子が自分で書き換える事は？」

「それは出来ません。基本プログラムはマルチの意思とは無関係なもので、諭えるなら孫悟空の輪っかです」

「うまい事を言うね、山本君」

長瀬がにやりと笑ったが、山本はそれに構わず話を続ける。

「それはそうと、流通ルートの押えは出来てるんですか？」

「ああ、それは中央物流管理のコンピュータにチェックをさせるようにしてあるから、いつでもマルチ本体を確実に出せるようになってるよ」

「そうですか」

「ただ、実際にデータディスクを送るのは、サポート登録がされてからだね。そうでないとデータ収集のためのメンテナンスも勝手に出来ないからねえ」

『TENDER HEART』

「それはしょうがないですね。本来はサポートもこつちでやる事じゃないんですから…」  
こんな調子で作業の細かな点まで確認をして行き、一通り終わった時。

長瀬が苦笑しながら言うのだった。

「何だかんだ言っても、君もやっぱり技術屋なんだねえ…」

長瀬の言葉の意味するものを山本は分かっていた。だが、それはいまさら悩む事ではないのだ。今回のプロジェクトは自分の研究のためでもあり、マルチのためでもある。そう決めたはずだ。

「いえ、そればかりでもないんですよ」

と小さく笑いながら答える山本を見て、長瀬は一言返した。

「親馬鹿だね、君も…」

マルチの最終テストからかなりの時間を経て、市販型が正式に発売された。マルチの妹たちは基本部分はマルチを受け継いでいたが、動力やバッテリーはローコスト化が図られ、記憶装置の容量もマルチより数段劣っていた。感情制御御による挙動部分もすべて排除されたので、彼女たちの表情は変化に乏しい。

だが、かなりのローコスト化が実現し、メイドロボの購入層の拡大が大いに期待され、事実それなりの売れ行きを示していた。

だが、山本のもとには、肝心な報告が入っていなかった。

未だに彼氏——藤田浩之がHM12型を購入したとの知らせがないのである。

安くなったとは言え、学生が購入するには確かに高い買い物である。だが、約束したはずだ。彼はマルチと約束したはずだった。いや、そんな事ももう忘れているかも知れないふと、そんな考えが山本の頭に浮かぶ。

今までマルチが保管されていたドックには、もう何も無い。マルチの本体はいつでも出荷できるように市販型同様の梱包を施されて、物流センターに保管されているからだ。

そんな空のドックの操作卓の前に座り、山本はぼんやりとしていた。ふと、もう一つのマルチを呼び出そうかとも思ったが、今になって話す事はないように思えた。

今マルチを呼び出して、彼の事を話してどうなる？ 事前に余計な情報を入力するのはよくないだろう。それとも、マルチの気持ちを知って、どんな反応が出てくるかを見るのもいいかも知れない。



『TENDER HEART』

結局はジレンマに陥りどちらにも踏み切れなかった山本だが、しばらく悩んだ後、とにかくマルチを呼び出してみようと言う気になった。呼び出した上でたわいのない話で終わるか、彼の事を切り出すかは、その時に考えればいい。

そう決めて、操作卓のキーを叩こうとした時。

不意に誰かが山本の名を呼んだ。

山本がそれに答えると、その声は物流センターからの連絡が入っていると告げる。

来た。

待ってた情報がついに来たのだ。あるいは、恐れていたもの来てしまったのだ。迷いは断ちきったはずなのに、いざとなるとどこかに逃げたいと思う気持ちが湧いてくる。

「彼は約束を守ってくれたじゃないか、マルチ……」

操作卓の画面に向かってそうつぶやいた山本だが、その画面にマルチの顔がある訳でもない。だが、そうせずにはいられなかったのだ。

この先は研究と言う名のもとに、マルチはマルチに戻り、彼氏と一緒にいられるようになる。もしかしたら自分のやろうとしてる事は、とてもひどい事なのかも知れない。

だが、マルチが幸せなら……あの子自身が幸せと思うのなら、それでいい。仮にそれさえも自分が作り出した偽りの心だったとしても。

——マルチは幸せかい？

『わたし、とっても幸せです。だって、山本さんも他の皆さんも優しい人ばかりですから』

『TENDER HEART』

——優しいって何だと思う？

『…うまく説明できないですけど、山本さんたちは優しい心の持ち主なんです』

——優しい心の持ち主？

『はいっ』

——じゃあ、マルチもそうなんだよ。

『えっ…。わたしもそうなんですか？』

——ああ。そうでなきゃ、優しいなんて分からないじゃない。

『そうですか…。あつ、そうか。皆さんが優しいから、皆さんに作られたわたしもその優

しい心を持つてるって事ですよ？』

——ああ…。マルチは優しくて、いい子だよ。

『ありがとうございます。皆さんに作られて、本当にわたし幸せです』

——僕もそんなマルチを見ると嬉しくなるよ。

かつてマルチと交わした会話。それは感情の成長を促すためのカリキュラムに過ぎな

かった。単にプログラムの動作を確認しつつ、データの蓄積をしてただけのはずだった。

それだけの事なのに、その時のマルチの言葉がずっと頭から離れない。

「優しい心ってのはね、ほんとはこんなじゃないんだ…。俺は優しくなんてないんだよ、

マルチ。君は単なるプログラムとデータの集まりに過ぎないんだよ…。そんな心なんてあ

るはずがないのに…」

知らず知らずのうち、山本は操作卓に肘をつけて、顔を伏せていた。顔を上げる事が出

来なかった。何故なら、山本の両の瞳から止めどなく涙が溢れてしまっていたから。

『TENDER HEART』

自分が何故涙を流しているのか。それもよく分からなかった。

『山本さあん、泣かないでくださいよお』

ふと、そんな声が聞こえたような気がして操作卓の画面を見たが、そこには何も映っていない。だが、それこそマルチの“心”の声だったのかも知れないと山本は思うのだった。

何故なら、マルチは「Tender Heart」の持ち主だったから…。

ようやく彼氏のサポート登録がされたのは、マルチ購入からずいぶんと間を置いてからだった。

その情報を得ると、山本はすぐにデータディスクを発送した。その後の彼氏の行動の結果は、初期メンテナンスの時にすぐ分かるはずだ。

本当に彼氏はマルチとの再会を望むだろうか。

もし、すでにマルチの事など冷めていたら、このプロジェクトはそれだけで破綻してしまう。だが、

それはそれでいいかも知れない…と、山本は思っていた。マルチはあの時のままでいられるのだから。彼氏もいつしかマルチの事など忘れ去って、普通に暮らしていけるだろう。

…いや、そんな事を今考えていても、意味はないのだ。

ただ、恋人たちが幸せであって欲しい、と願うばかりだった。

End.

『TENDER HEART』

『TENDER HEART』

初版:1997/05/31

第二版 (一部修正) :1997/06/03

(一部修正) :1997/06/10

第三版 (改題及びPDF化) :1998/07/30

(PDF書式変更) :1999/11/06

PDF書式変更:2016/05/08